

して認められる。またヨーロッパにおける「病院」というものの誕生は四世紀のキリスト教における施設にさかのぼる。有名なものはカイサリアのバシレイオスの建てた施設群である。このように看護を中心とした医療行為は、初期キリスト教が専心した事業の一つであった。そしてその事業の根本には隣人愛やフィランソロピア（人間愛）などのキリスト教特有の倫理思想が見出せるのである。

生命倫理の問題は、医学研究・医療の場において忘却されたのは誰かという視点を根本にもつ。人体実験においては実験結果に注意が傾くあまり、人間としての被験者を忘却したことが問題となった。また脳死・臓器移植は数多くの難病患者にとつて希望の医療であるとしても、それでもそこでは臓器提供者の治療やその死が忘却されているのではないだろうか。人工妊娠中絶の問題について、プロライフとプロチョイスいずれの見解においても、それぞれ忘却されている者はいないのか。ヒト胚研究の是非をめぐる議論のなかでは、ヒト胚という最小の「ヒト」が、研究という大義の下で忘却されようとしていたのではないか。そしてこうした問題の中でそもそも「人間」ということ自体が忘却されつつある。この忘却から救い出すことが生命倫理の課題だと考えるならば、キリスト教の愛、とくにフィランソロピアの思想は大切な視点であろう。

このようにキリスト教にとって生命倫理は何か根本的な問題であるはずであり、とくに宗教的な愛の視点からのアプローチが期待されるが、まだ十分といえる状況にはない。日本においても、歴史を顧みるならキリスト教倫理に裏打ちされた西洋医

学、具体的には宣教師であり医師である西洋人が日本の医療に果たした役割は大きいはずである。しかしそれが今日においても、キリスト教系の病院においてどこまで影響を保っているのが問題であろう。この点を含めて、まずキリスト教の問題として、キリスト教的な視点から生命倫理の問題について語ることは緊急の課題だと言える。

さらにキリスト教を含め、宗教とはある種極端なところがある。右の頬を打たれたら左の頬をも差し出せという言葉に見られるように、宗教性、宗教的生というものはある種極端さの中に存立する。生命倫理の問題が忘却の問題であり、生の周縁にいる人びとへの忘却を回復するものであるとすれば、本来、宗教こそ生命倫理の問題を考えるべき課題を有しているのではないかと考える。

「宗教家」の生命倫理への取り組み

—— 仏教の立場から ——

佐藤 雅彦

現代的な問題を仏教に問いかけると、問われる「仏教」とは何か？ どの国のいつの時代の仏教なのか？ これらは、しばしば問題とされる。歴然としてある二千年前の仏陀そのものの教説、数百年以上経過した各宗派の開祖の教え、国や時代を越えてさまざまな仏教が存在する。本発表では、現代の日本

パネル

の仏教に主軸をおき、仏陀の根本的な教説を射程に入れて進めることとする。

また現代日本の仏教に生命倫理が問いかけるものを考察する場合、浄土宗や日蓮宗といった種々の宗派といわれる組織、教団、または寺、寺院、教会といった活動の単位、集団があり、それを実践する僧侶や、信者（檀家や信徒）といった幅広い構成で考えられる。これらは総じて、仏陀の教説に倫理的な規範を持ちつつ生きる「仏教の実践者」といえる。なかでも、その実践を専門とする僧侶や、教師は、仏教の中で言えば「仏教者」とよばれ、広くは「宗教家」と類別されよう。生命倫理からの問いかけに答えるのは、主としてこの宗教家の役割ということになる。さらに換言すれば人の問題といえる。

仏陀の教説それ自体は、今後、なんら変化をすることはない。多くの場合、生命倫理において問題とされることを、仏教経典に尋ねると「そのような問題に対する答えは出ていない」「お釈迦さまの時代には、このようなことはなかった」との嘆きを耳にする。生命倫理の問題に対する答えを考えられるかは、仏陀の教説を、個人であれ複数の人々であれ、このように「解釈し、受け止めさせていただく」「頂戴する」といった姿勢でのぞみ、その思想を応用しようとする営みに他ならない。例えば「不殺生」という教説がある。仏陀の教説の中では、日常の倫理的規範の第一にあげられる。しかし「いのちを殺さない」という教えは、「殺さない」ということは「生かす」ということと同意に受け止められ、さらには「いのちを生かす」というように比重のおかれ方がかわり、拡大解釈される。この作業は、

後世における人の解釈だといえる。

例を示して考えると、本年七月に脳死・臓器移植改正法案が可決された。ほとんどの仏教教団は、脳死を人の死とすることに反対し、法案可決に異議を唱えた。しかし一刻も早く臓器移植が行われることを望む人々に、仏教者の意見は、どのように受け止められただろうか。仏教の根本的な理念である「苦しみからの解脱」という観点から見ると、二者択一の一方の意見を認めたら、異なる立場で苦しみを抱える人々は、どのように考えるだろうか。仮に「誰もが救われる」という方法を示す仏教がある時、是非論の片方に同調するのは、誰もが、という普遍的な宗教の利点が失われるのではないだろうか。誰もが救われる仏教を標榜するのであるならば、生命倫理の問題に答えるときには、是非論を越えた立場に合致する発言を用意するべきだと考えられる。

「人が生きる」ということは、延命などに見られるような、人為的な技術の介入などを拒否して一生を終えたいと望む人もいれば、どんなにいやな人為的な技術であっても、受け入れて生きなければならぬという人もいる。どちらも「与えられたいのちを生きる」という点では、等しく大切な問題だ。しかし現代日本の社会では、生きるいのちこそ尊く、死にゆくいのちは、生きるいのちの犠牲になっても仕方ないという風潮が感じられる。いのちの重さの軽重を問題にしないのが、仏教の立場ではないだろうか。生命倫理の問題で、問いかけられているのは、仏陀の教説を、今を生きる人々に橋渡しする、宗教家の取り組みの問題といえるのではないだろうか。